

(二〇一三年度)

3 国語問題 (六〇分) (この問題冊子は22ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 五、解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいねいに消すこと。消しすぎはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破つたりしてはならない。
- 九、試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一
次の文章を読んで、後の問に答えよ。

精神科の病気で「離人症」と呼ばれる症状がある。この症状の特徴は、自分の内部にも外部にも生きいきとした現実が感じられなくなつて、なにかもが色褪せたコピーのように見えてくるという点にある。いろいろな物体がそこにあつて、それがなつてあるのだが、頭ではわかっているのに、それが本当にそこにあるという実感が伴わない、それがそこにあるということだが、こころで感じられない。音楽を聞いても、いろいろな音は聞こえてはくるけれども、それがこころに響かないから、まごつた音楽としての感動は出てこない。絵を見ても、そこに何が描かれているかは理解できるけれども、全体の意味も分からないし、美しいとも思えない。景色を見てもなんの感興もわかず、絵葉書を見ているのと一緒だと患者は言う。意識はあつても、こころのない状態だと言つてもよいだろう。

少し内省力のある離人症患者だと、「自分」というものが失われてしまつたという言い方をする。自分のことを考える瞬間ごとに、いまの自分が自分であるということは分かるけれども、いまの自分とさっきの自分とがこころの中でつながらないから、本当の自分としてまごまらないのだと言う。ずっと自分のことを考え続けていると、次から次へと「自分の層」が積み重なつて行くだけで、以前の自分はだんだん下積みになつて見えなくなり、自分とははたしてどんなものだったのか、まごつたく捉えられなくなるのだと言う。

そういうつた内省力のある患者の場合、時間はどうなつていのかと尋ねてみると、時計を見ればいま何時分だということはあるし、カレンダーを見れば今日が何日かはわかるけれど、そこに時間というものがあるという感じがまごつたくはないのだと言う。今、今、今、今という不連続の点線のようなものはあるのだけれども、今と今とのあいだに時間が流れないから、「いま」という実感にならないのだとも言う。

離人症患者のこころいつた言葉を聞いていると、「自分」というものと存在の「実感」というものと、そして「時間の流れ」というものとは、人間のこころにとつて結局は同じことを指しているのに違いないという気がしてくる。そして、「こころでいう」時間

の流れ」とは、時計やカレンダーで読み取る時間とは何の関係もないものだし、意識の中での今という点の不連続な継起ともまったく別の次元のものであるに違いないということもわかってくる。時間を空間内の物体の位置の移動で考える物理学の時間概念も、時間を意識内での継起で考える心理学や哲学の時間概念も、実感としての、あるいは自分自身の存在と密着した生命的感覚としての時間感覚とは非常にほど遠いものなのである。

現在のわたしたちがなんでいる「科学」は、西洋古代の文明に源を発している。西洋古代の文明とは、エイドス(形相)をイデア(本質)と見なした文明である。形のあるもの、目や耳でもって、つまりは意識にとつて「それが何であるか」を識別しうるものだけが、何千年の昔から人間の知の対象とされ、そういった物象や形像についてのみ「科学的思考」が試みられてきた。しかし、はたしてそれでよかつたのだろうか。わたしたちのところが本当に感じ取っているのは、はたしてそのような形のあるものだけなのだろうか。形のないもの、目や耳では捉えられないもの、それでいて私たちが生きているという現実そのものから絶対に切り離せないもの、そういういたものを根本的に忘れたところから、わたしたちの「科学」が生み出され、この忘却は二十世紀末の現在、ますますはつきりとその正体を現してきているとは言えないだろうか。二十一世紀に、もしいままでとはまったく別の、新しい知の次元が模索されるとするなら、それは間違いなくこの「形のないもの」についての知の次元であろう。そしてわたしたちにとつての「生きた時間」とは、疑いもなく、この「形のないもの」に属しているのだろう。

現代でも、西洋文明や科学に汚されていない地域では、この⁵ような形のない時間がまだ生き続けているらしい。ケニアのカムバ族出身の宗教学者ムビティによると、アフリカ原住民にとつて存在する時間様態は、スワヒリ語でいうと「ササ」と「ザマニ」の二種類だけだという。「ササ」は、生きいきとした現在の持続の中で捉えられた事柄に与えられている時間様態であり、「ザマニ」は「無窮の過去」あるいは「あらゆるものを溶かし吸収する大洋、万物の貯蔵庫」で、時間の一領域というよりは、むしろ恒久的な実体的存在の領域とみなすべきものである。たとえば死者は、肉親や友人に記憶されているかぎり「ササ」とどまることが、知己の最後の一人が死んだときには「ザマニ」に入って完全な死者になる。(J・S・ムビティ『アフリカの宗教と哲学』大森元吉訳)。

このように、「ササ」を「ササ」たらしめている「ササ性」、つまりわたしたちのこのころにとつての「生きいきとした現在」の時間を可能にしているのは、これに関係する個々の個人が生きていて、それに関与しているという事実である。生きた関与者がいなくなれば、「ササ」も「ササ」ではなくなる。つまりはそこに時間が流れなくなつて、永遠の「ザマニ」が開ける。しかし、そこでなお生きている人たちは、彼ら自身にとつての「ササ」を生き続けている。先に述べた離人症の状態では、患者の意識は科学のいう時間の中にとどまっているのに、患者のこころは「ササ」から隔絶されている。患者は生きながらにして現実への関与を停止しているのである。

わたしたちは、時間が一定の不可逆の方向に進行していると思つてゐる。これを時間が未来の方向に向かつて進むと感じる人も、過去へと向かつて流れると感じる人もあるだろう。いずれにしても、時間は「まだない」から「ある」を通じて「もうない」への方向で、あるいは逆に「これまで」から「いま」を経由して「これから」への方向に動いている。しかし、未来にしても過去にしても、すべてわたしたちが生きている現在における「ある」から見られた「まだない」であり「もうない」なのであつて、そこには必ず生きた「わたし」が立ち会つてゐる。物理学は、時間のこの不可逆性を説明しようとして「ビッグバン」という壮麗なドラマを考えたが、奇妙なことに時間のそもそもの始源であるはずのこの大爆発を考えると、そこには必ず仮想上の「わたし」が、見物人として立ち会つてゐる。だれ一人として人間の立ち会わないような出来事を、ひとは構想することができないのである。終末論的な「この世の終わり」にしても同じことだろう。人類がすべて死に絶えて、生命の一片も残つていない状態での時間の消滅を考えることはできるだろう。しかし、そこにもやはり、不思議なことに仮想上の「わたし」という見物人だけは生き残つてそれを見ている。「わたし」の立ち会つていないような「時間の死」を、だれが想像することができようか。

(木村敏『形なきものの形』)

問一 傍線部1「意識はあっても、こころのない状態」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a どのような感動や感興といった経験をしても、後で色褪せた経験にしてしまう意識の状態である。
- b およそ知るとか理解するとかいった精神的活動自体がまとまりを欠いていて自己を失っている。
- c 意識では何であるかを認識できても、その認識はひたすら感覚知覚のみに依存した経験で終わっている。
- d 知るとか理解するとかなどの精神的な営みはあるが、生きいきとした現実の感触が欠けている。

問二 傍線部2「自分の層」が積み重なって行く」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 以前の自分と今の自分が不連続であるから、今の自分にとって、以前の自分は価値がないので棄ててしまう。
- b 常に現在時点での自覚意識はあるものの、それらは断片的なまま堆積し、自分とは何かを捉えられなくなっている。
- c 以前の自分と今の自分とがつながらないとしても、それらは堆積することで不連続な自分を作り上げている。
- d 自分のことをその都度考えるのみであって、その結果は無価値な層の集まりとなり、ついには自己を見失う。

問三 傍線部3「内省力のある患者の場合」とあるが、筆者はこのような「場合」についてどのように考えているか。次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

a 「時間の流れ」とはどのようなものであるのかを教えてくれる貴重なケースであり、物理学や心理学及び哲学を越えた学問的成果をもたらすことがおおいに見込まれる。

b 自己の内面への洞察から、時間意識をも捉え、その結果自己の喪失まで見いだす特異な状態が、更に新たな時間を発見するに至る、優れた内省力を示している。

c 「自分」と、存在の「実感」とを、「時間の流れ」に結びつけ、「人間のこころ」というものを露わにすることから、離人症の解明につながると期待している。

d 外的な事象への実感の喪失だけでなく、自己の内面や時間意識の実感の喪失にまで至っていることから、人間のこころを探る上で、本質的な問題を提供している。

問四 傍線部4「人間の知の対象」とあるが、筆者は「知の対象」についてどのように考えているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 西洋古代以来、知の探究は事物の形相的部分に限定されていたが、それが現実の実感から離れた科学を生んだ以上、新たな知の次元も必要である。

b 西洋古代から追究してきた本質という対象は、もはや科学において限界に達した以上、科学ではない新たな知の次元とその対象が必要である。

c 現実から絶対に切り離せないものを西洋古代はその始めから忘却してきた以上、過去を反省して全く別の知の次元を開き、模索しなければならない。

d 「科学的思考」は眼や耳で捉えられる物體的な形の知の探究によって根本的な忘却をもたらしたから、未来に期待してむしろ新たな知の次元を目指さねばならない。

問五 傍線部5「形のない時間」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 西洋文明や科学に汚されていない地域でのみ生き続けている非科学的な時間。

b 科学的な思考を否定して、眼や耳では捉えられないものを大切にしようとする時間。

c 本質によってではなく、生きているという実感によって支えられている時間。

d 西洋文明と違って、エイドスをアイデアと見なさない文明で成立した時間。

問六 傍線部6「ササ」と「ザマニ」とあるが、筆者はこの二種をどのように考えているか。次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

a 「ササ」は生者が関与する生きいきとした現在であるが、「ザマニ」は死者となった人が直ちに向かわねばならない無窮の過去である。

b 「ササ」は生きいきとした時間が流れる生者の領域であるのに対して、「ザマニ」は生者との関係を断つた恒久的な存在の領域である。

c 「ササ」は個人が生きている生の現実であるが、「ザマニ」は生きた個人が関与しても無意味となる永遠の領域である。

d 「ササ」は個人が関与しているという事実がもたらす生きた時間であるが、「ザマニ」は生者と断絶した時間の流れである。

問七 傍線部7「患者は生きながらにして現実への関与を停止しているのである」とあるが、どういうことか。その説明として、次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

a 患者は物理的な時間のうちに生命をもつて生きているとしても、決して生きた時間を生きているわけではない。

b 患者は生命をもつて生きていると言えるが、しかし「ササ」には所在しない以上、生きているとは言えない。

c 患者は、科学という本質を追究する時間の中に居るからこそ、科学と同様に現実の関与から離れ去っている。

d 患者は、「ササ」から隔絶され、「ザマニ」という科学の時間の中で生かされているにすぎない状態にある。

問八 傍線部8「見物人として立ち会っている」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 実際は、宇宙の始源を見物することはできないが、客観的観察者として立ち会う想定はできる。
- b 時間は不可逆なものであると思われがちであるが、実は可逆性もあると考えねばならない。
- c 人間とは時間的な存在であり、どんな出来事にも自己の今の生を関わらせて生きるものである。
- d 科学の一つである物理学は、時間の不可逆性を説明したが、自らが始源に立ち会うという矛盾をおかしている。

問九 傍線部9「時間の死」を、だれが想像することができるだろうかとあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 時間とは過去と未来への関わりと共に存在するのであって、その限りですべての時間の中の出来事に関与できる。
- b 科学は時間を物体的に考えるが、このような現実から遊離した生き方こそ時間の死というべき事態である。
- c この世の終わりが来て、人間が一切消滅してしまっても生き残る人間は存在するから、時間はむしろ不死である。
- d 人間のこころとは時間の流れそのものであるから、人間が現実に関わりつつ生きる以上は、時間は生き続ける。

問十 本文の内容と一致しているものはどれか。次の中から二つ選べ。

a 形のあるものは、人間にとって、事物の理解や文明をもたらした意義があるが、しかし本当に大切なものとは形のないものである生きいきとした現在の時間である。

b 人間とは、今と今とをつなぐ流れる時間を生きる存在であるから、それを忘却させた科学を反省し必ずや乗り越えて、自己を取りもどすことができる。

c 人間は、科学や文明という点で進歩を遂げたが、それらは逆に人間を「ザマニ」に追いやっており、「ササ」を取りもどすべく時間のあらゆる場に立ち会わねばならない。

d 人間は、離人症患者のように、科学のおかげで自己を見失いがちであるから、文明に汚されていない地域を見習って、生きた時間を再興して行く必要がある。

e 人間にとって、離人症患者の症状は、科学や時間の本質を捉えるための大きな手がかりとなるから、新しい知の次元と生きた時間を目指して患者に対処して行く必要がある。

f 人間は、「まだない」と「もうない」をつなぐ生きた現在を生きており、いわば「ササ」におけるような様々な事物に関与する生を生きている。

次の文章は、元文五年（一七四〇）、作者が四十四歳の時に、江戸から故郷の浜松に帰省した際の紀行文である。これを読んで、後の問に答えよ。

夕づけて箱根山にかかる。関までは苦しとて畑といふ所に宿る。いとはや夜寒なれば、寝もいらぬに、滝の音鹿の声うち籠めたる山の秋風聞きあかされて立ち出でぬ。ほのぼのと明けゆく山の峽よりかへり見れば、朝霧白く立ち渡れるは海を見ん心地す。関越ゆるほど日さし昇りて、湖の面のどかに見渡さる。彼方此方山を巡れる水の面は、三巴といふや似つらん。蚕叢に擬したる人は誰ばかりなるや。その後いくそばくの人か望み見けむ。この湖にさせる聞えなきぞあやなき。

延暦十一年に富士の山焼けて、石など飛び散りければ、足柄の道塞がれりとして、初めてこの道は開かる。されどもまたの年もとの足柄に返されける事は書に見ゆるを、後またこなたを越ゆることになれるは、いつばかりよりならん。貞観六年七年にも焼けて、甲斐駿河の地など埋れしことあれば、その頃よりの事なるべし。

富士の煙の絶えしは、延暦の頃よりたびたび焼けし故なるべし。およそ高き山には、水あり火ありて相打つ故に、鳴沢もありけんを、火終に大に起こりて、岩を飛ばし土を散らし、水を蓄ふる勢ひなければなるべし。山は火あるのみにては煙立たざるか。宝永のころも焼けにけれど、その前つ方に煙立ちしことを聞かず。水の火あるいはほに触れて立てる息なるべし。何某の岳もかなりといへり。「今は立たず」といへるを思ひ合はすれば、貞観の時に絶えたるにやあらん。

今日は何某の国より貢物贈るとて、さりあへぬまで行きかひたり。「荷前の箱の荷の緒にも」など誦して下るに、ふりさけ見らるる海山の興あるにも、過ぎしころ雨に越えし折思ひ出でらる。「すべて深山は雨ばかりあはれなるはなし。ここかしこ熨り出づる雲の薄き濃きに、山々は面影ばかりぞ見ゆる。「人面より起る」と吟じて越えつる、苦しからぬにしもあらねど、あなをかしとみしは」といふに、人々は「例のひが心にこそ。いぶせかるべき物好みなめり。龍に乗るらん山人にや誂へまし」と笑ふ。

からうじて三島の駅に至る。古き歌に「ちちの実の父」と続けしは、木の実にてこの国にありといふ人のありしかば、問ひ求

むれど見知れる人もなし。

7 古郷のははその影は問ひゆけどちちのみなきぞ悲しかりける

今日は雲迷ひて富士も見えず。原の宿わたりより雨降らんとす。富士川は明日こそ渡るべきを、水嵩や増さりなむ。夜をか
けてだに蒲原の宿までいかで行かんとて、夕つ方より立ちまよふ雲の脚とともに急ぎつつ行くに、空晴れて思はざるに月さや
かに出でにけり。

夜舟こぐ富士の川門に霧晴れて高嶺に出づる月を見るかな

9 「夕の雲の誘はざらましかば、かかる所の月は見ざらましを、心ありけり」など言ひ合へり。

(賀茂真淵「岡部日記」)

〈注〉○関―箱根の関所。○畑といふ所―箱根と小田原の間にあった宿場。後出の「三島の駅」「原の宿」「蒲原の宿」もすべて東

海道の宿場。○湖―芦ノ湖。○三巴―中国後漢時代、いまの四川省にあった巴郡・巴東郡・巴西郡の総称。○蚕叢―

「蚕叢」は李白の詩に出る語。けわしい山道をいう。箱根路にこの語を用いたのは林羅山。○延暦十一年―延暦二十一年

(八〇二)が正しい。この頃大きな噴火があった。○貞観六年―八六四年。○鳴沢―音高く流れる溪流。○宝永のころ―

宝永四年(二七〇七)に富士山の大噴火があった。○今は立たず―「古今和歌集」(九〇五年)の仮名序に「今はふじの山も

煙たたずなり」とある。○荷前の箱の荷の緒にも―「万葉集」卷二に出る和歌。「東人の荷前の箱の荷の緒にも妹は心に乗

りにけるかも」○人面より起る―李白の詩「友人の蜀に入るを送る」に出る。「山は人面より起り、雲は馬頭に傍ひて

生ず」。山道の険しいことを述べたもの。○ちちの実の父―「万葉集」卷十九に「ちちの実の 父の命 ははそ葉の 母の

命 おほろかに 心尽して」とある。「ちちの実の」「ははそ葉の」はそれぞれ父・母にかかる枕詞。

問一 傍線部1「滝の音や鹿の声うち籠めたる山の秋風聞きあかされて立ち出でぬ」の説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 滝の音や鹿の声のまじった秋風の音のために眠れないまま朝出発した。
- b 滝の音や鹿の声のなから聞えてくる秋風の音を明け方まで聞いてから出かけた。
- c 滝の音や鹿の声がこもって聞える山からの秋風にせかされるようにして宿を出た。
- d 滝の音や鹿の声のなから聞えてくる秋風の音によく耳を傾けてから出発した。

問二 傍線部2「この湖にさせる聞えなきぞあやなき」の現代語訳として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a この湖にこれといった歌がないのは、面白みに欠けることだ。
- b この湖のことがあまり評判にならないのは納得がいかないことだ。
- c この湖を見に来る人が少ないのは筋の通らないことだ。
- d この湖の話为谁も聞いたことがないというのはよく理由がわからないことだ。

問三 傍線部3「山は火あるのみにては煙立たざるか」の理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 火山は、爆発すると、岩や土を飛ばしてしまうから。
- b 何度も噴火すると、火山の形が変わってしまうから。
- c 火山の煙は、火山に含まれる水分と熱によるから。
- d 煙を出さずに突然爆発するタイプの火山もあるから。

問四 傍線部4「さりあへぬまで行きかひたり」の現代語訳として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 避けることができないくらい多くの人が行き違った。
- b やむをえず、行ったり来たりした。
- c ことわりきれなくらいに、往来には人がいた。
- d さりげなく、たがいに道をゆずりあっていた。

問五 傍線部5「いぶせかるべき物好みなめり」の現代語訳として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a うつとうしいことが好きな方のようにすね。
- b むさくるしいことが好きな方のようにすね。
- c かわったことが好きな方のようにすね。
- d あぶなつかしいことが好きな方のようにすね。

問六 傍線部6「龍に乗るらん山人にや詠へまし」など笑ふについて、

(1) この箇所現代語訳として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 「龍に乗るとかいう仙人にお願いしてみましようか」と言って笑った。

b 「龍に乗るとかいう仙人に作らせることにしましよう」と言って笑った。

c 「龍に乗るとかいう仙人を呼んだ方がましでしょう」と言って笑った。

d 「龍に乗るとかいう仙人にお願いした方がよかったのに」と言って笑った。

(2) 人々はなぜ笑ったのか。その説明として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 雨が降って大変な道中なのに、山奥の雨の景色はすばらしいといって、古歌や漢詩の蘊蓄うんそくばかり披露していたから。

b けわしい山道で、本当はつらい思いをしているのに、無理に楽しそうに振舞っているのを見破られたから。

c 人々は、けわしい山道を越えるために大変な思いをしているのに、作者だけが、楽しそうに話していたので。

d 以前に越えたときよりも景色がいいことを強調して、風情があるとしきりに語ったので。

問七 傍線部7の和歌の解説として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 故郷の母は存命なのに父がもう亡くなっていないという寂しさを「ちちの実」の故実探索にことよせて述べている。

b 「ちちの実」という植物は実在しないのに、あるといった古人のことをうらめしく思っている。

c 故郷にいる父母のことを思い、これから会いに行くのを楽しみにしている。

d 「ははそ」という植物は存在するのに、「ちちの実」という植物の存在を確認できなかったことを残念がっている。

問八 傍線部8の現代語訳として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 今夜、富士川の水かさが増えているにほしい。そうすれば夜のうちに蒲原までなんとか行けるだろう。
- b 明日、富士川の水かさは増えているにちがいない。夜蒲原まで行き着けるかどうかわからない。
- c 今夜、富士川の水かさは増えるはずだ。せめて夜には蒲原のあたりまで行っておきたい。
- d 明日、富士川の水かさは増えているにちがいない。徹夜してでも蒲原まではたどり着きたい。

問九 傍線部9の現代語訳として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 夕べの雲に誘われるようなことがあれば、こういうきれいな月をみることもあっただろうに。
- b 夕べの雲に誘われなくても、こういうきれいな月はぜひともみておかなければならない。
- c 夕べの雲に誘われなかったので、夜、雨が降らず、こういうきれいな月をみることができたのだ。
- d 夕べの雲が誘ってくれなかったら、こういうきれいな月をみることがなかっただろうに。

問十 「足柄の道」と「箱根山の道」について、本文で述べるところに合致しないものを次の中から一つ選べ。

- a 箱根山の道は、延暦年間にはじめて開かれた。
- b 足柄の道が復旧したとき、箱根山の道は閉鎖された。
- c 史書に箱根山の道の名は記されていない。
- d 貞観の噴火で、足柄の道は不通になったと思われる。

三

次の文を読んで、後の問に答えよ。

科学技術は、確かに際だつて自然と対立した人間の行為とも捉えられる。しかし科学の所作そのものは、もともと変化していく自然をなぞることにおいて成立してもいる。そこで生じる事態を、行為の責任者を特定しつつ、ある種の因果的な帰責の発想だけで論じきることは、そもそもが無理ではないか。さらにいえば、自然が変わることに対して、それを保全しようとする「人間的」な行為そのものが、反自然として働く可能性すらあるのではないか（外来種問題にみられるような、強烈な異種排除的な感覚は、まさに「人間的」であり、本質主義者的である）。

現状の保全を旨として、技術による自然への介入の抵抗感を情緒的に掻き立てるだけならば、そこではつねに「現在」という位相の特権視が生まれてしまう。現在とは、もちろんそれなりに成立している場面であるわけだから、リスクを勘案する際に、それを特別視する意義はある。しかし生命的自然について、〈現在〉ある姿が無根拠に正しいというのは、さまざまの意味で誤謬に近い。〈現在〉のあり方を絶対的に肯定する保護主義的な言説が、²きわめて本質主義的なテーゼになってしまうことは、自然の本性という視点からも、矛盾以外のなものでもない。技術において、人格的な能動性との関わりで倫理的に思考されるべき部分と、それを越えた「曖昧さ」の領域が現れてしまうことへの注視とを、慎重に果たさなければならぬ。

しかし、そうではあれ、現状の体制を維持すべき倫理の範型にしないならば、そこではまさに技術の放縦な暴発が導かれるのではないか。そうであれば、それはやはり一部の人間（業績を作りたい科学者や医者、利益を上げたい企業や組織、あるいはまさに悪意や自己の欲望でもって自然を支配したい戯画的な権力者）の意志を反映した政策がとられがちになるのではないか。

他者とのコンセンサスや、ある種の対話を重視する倫理モデルが提示されるのは、³この観点からだろう。それは、さまざまな利害を抱えた多様な者のあいだの調整を旨として、基本的には言語による説得や納得という仕方⁴で合意を形成するものである。技術の改変を（濃淡の違いはあれ）被る当事者と、それに特権的なアクセスを備えた個人や組織との、⁵軋轢なき調停を図る。

際に、そうした合意への努力は不可欠である。繰り返しになるが、そのような事例の典型的な例は、医療分野におけるインフォームド・コンセントや、また近年の、科学技術に関するコンセンサス会議などであるだろう。倫理における臨床性が強調される由縁である。

しかしこれらのケースでも、それが有効性をもつ部分とたない部分とを、きちんと見定めることはますます重要になってくる。そもそも対話的なインターフェイスは、原理的に、ある種の問題性を含まなくもない。いかに対話の上での合意が、言葉を使った対等の状況で成立するように見せかけても、そこにはある種の非対称的な説得という事態が織り込まれてしまう。医者と患者の対等性は、そうした原則的な非対等性を根拠にしてしか成り立つものではない。科学者の技術政策の市民的理解は、やはり技術的な知識を持つものを持たないものとの圧倒的な差異においてしか生まれない。逆にこうした非対称性は、まさに説得という事態を可能にするものでもある。

しかしそうした背景をもちながらも、合意とは、合意そのものが見させている対等性という装いにおいて、事態を正当化させる仕組みをもつてしまう。つまり説得というかたちで、実際には一方の側が合意させられているにもかかわらず、あたかもそうでもなかったかのように責任が分かちもたれてしまう。医療において、インフォームド・コンセントが(それを行う医師の「良心」は疑いないとしたところで)、必ず医療訴訟に向けての予防措置として、まさに医者の責任回避(あるいは軽減)に向けての戦術という側面をもつことは明確にされるべきである。合意とはいっても、それこそ誰かの利益のための合意形成なのである。

ここでも議論は、本質的には意志論の領域と折り重なっていく。人は、意志的な領域のなかで、はっきりと承認したものにだけ合意するわけではない。合意とは、大抵はすでに何かが無意識的に決定されたあとで、その追認のようなかたちで納得してみせることでしかない。もちろんそこでの納得の感情という、まさに言語行為が産出する効果について、勘案するべきではあるだろう。しかしそれは、事態に対し共犯関係になることを、つまりはリスクを分かち持つことを、まさに自己に向けて確認することなのである。そこではレトリックこそが重要だ。知識があり、言葉が巧みである者は、説得という場面では大抵が

優位なのだ。

対話や合意とは、言語による対人的な関係性における出来事である。この領域の倫理的意味は、もちろん低く見積もられるべきではない。言葉の効果とは、社会に参与し、そこでの出来事に責任をとり、社会的感情を統御する際にきわめて重視されるべき要素ではあるからだ。しかし同時にこの領域は、それだけで独立して存在するわけではないことも考えなければならぬ。それは言葉以前の状態で働いてしまう、技術と接続した自然の場面に、あるいはある種の「曖昧さ」の領域に、必ず関わっている。

こうした領域とは、言葉が主軸になるものではない。あるいは、言葉によって明かされる、明確な責任性が設定されるものでもない。それはまさに、身体的なインターフェイスに伴う「曖昧さ」として引き立てられるものではないか。

(檜垣立哉「曖昧さの新たな倫理へ」)

〔注〕 帰責：責任を負わせること。

インフォームド・コンセント：医療者が患者に治療方針や内容を十分に説明し、納得と同意の上で治療を進める診療原則。

インターフェイス：情報交換を仲介すること、またその仕組み、手順、規格。

問一 傍線部Iの意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 〈現在〉がなんらかの体制として成立している以上、現状とは意味のある重要なものである。
- b 保全すべき現状を変えてしまうようなリスクは、なんらかの意味のある重要なものである。
- c 特権視されている〈現在〉に介入するようなりリスクは、なんらかの意味のある重要なものである。
- d 自然を保全しようという意図による行為では、現状はそれなりに意味のある重要なものである。

問二 傍線部2の意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 「人間的」な行為をもたらす言説が、人間の正しい倫理的立場だとされてしまう。
- b 〈現在〉を絶対的に正しいとする見方が、「人間的」で倫理的な見方だとされてしまう。
- c 現状を特別視する反自然的な主張が、自然の本性に基づいた理論だとされてしまう。
- d 情緒的な抵抗感を掻き立てる言説が、自然と一致する人間の主張だとされてしまう。

問三 傍線部3の「この観点」の内容としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 現状の維持を目的にしないと、技術で自然を支配しようという意志が特権視されるだろうという観点。
- b 〈現在〉のあり方から出発しないと、説得や納得による合意形成ができなくなるだろうという観点。
- c 現状を倫理上のモデルとすれば、技術を利己的に使いたい人間の欲望が抑制されるだろうという観点。
- d 現状の保全から出発することで、利益を追求する人間による政策決定がなくなるだろうという観点。

問四 傍線部4はどのようなことを意味するか。その内容として適切でないものを一つ選べ。

- a 対等ではない人間と人間とのあいだでのみ、説得などによる合意形成が生じうる。
- b 医者が患者にない知識を持つからこそ、患者は医者からの指示について納得できる。
- c 技術的な知識を持つものと持たないものという格差の問題がいつでもつきまとう。
- d 対話による合意形成には、納得や説得が有効な部分とそうでない部分がある。

問五 傍線部5の本文中における意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 説得した方がいつでも責任回避してしまえる仕組みになっている。
- b 納得した側がより大きな結果責任を持たされる構造になっている。
- c 両者が結果として対等の権利を持てるような仕組みになっている。
- d 説得した側が多くの利益を得ても不都合でない構造になっている。

問六 傍線部6の意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 言葉を使って合意が行われる場合、レトリックなどの問題をもっと重視すべきである。
- b 言語行為による合意においては、合意を産み出す感情の要素が重視されねばならない。
- c 合意の形成について考える上で、納得したという気持ちが生じるのは大事なことである。
- d 対話によって合意が形成される際には、合意した人々が共犯関係となる点が肝要である。

問七 傍線部7のように主張される理由として適切でないものを一つ選べ。

- a 言葉には、説得や納得の際にリスクの共有を自分自身で確認するという要素があるから。
- b 言葉による対話や合意は、調停によって対立を回避するために重要な働きをするから。
- c 言語は人間が社会生活を営んだり、共通の気持ちを抱くのに重要な役割を果たすから。
- d 言葉による対話や合意には、社会的な諸問題における責任のとり方が関与しているから。

問八 傍線部 8 の「領域」としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 納得の感情の領域
- b 身体性に関わる領域
- c 言語行為の領域
- d レトリックの領域
- e 市民的理解の領域

